フォト・エッセイ●ミャンマー

シャン高原のタンデー村

写真と文　髙橋昭雄
●Akio Takahashi

5日に1度開かれる村の市。シャン人のほか、パオ、ダヌ、インダー、ミャンマー、カチン、中国など近隣に居住する様々な民族が集まってくる。

シャン高原の山々の間に深く刻まれた谷の中に、シャン州タウンジー県タンデー村はある。標高は約一〇〇〇メートル、冬には氷が張るほど寒くなる。この村は一九九一年までパオ民族機構（PNO）の支配下にあり、ミャンマー中央政府も迂闊には足を踏み入れることができなかった。停戦協定の前までは、村民はPNOに少額の税金を払い、中央政府の重税や農産物の徴発を免れていたという。私のような外国人が村に滞在するのはもちろん初めてのことである。

村の民族別人口統計によると、シャン人が最も多く、続いてダヌ、パオ、の順となっている。そしてわずかながら、「ミャンマー人」も住んでいる。ここでミャンマー人とはもちろんビルマ民族をさす。しかし一九八九年の「Burma」から「Myanmar」への国名の英語名称変更時に、「バマー（ビルマ）」はビルマ「民族」の呼称、「ミャンマー」は国内に住むすべての民族を包摂する「国民」の呼称、と決められたはずである。もっとも、「ミャンマー」は文語で、「バマー」は口語であるという違いのみで、その意味するところは本来「ミャンマー（バマー）」という「民族」にすぎない。歴史的経緯を無視した新概念の導入は、まだ少数民族には受け入れ難いようである。

タンデー村の耕地は、山々の麓から湧き出てくる三つの泉によって潤いを与えられ

木々がうっそうと生い茂った湧水の森。

畑を耕起する水牛と人。

手前は灌漑水路と収穫後の小麦畑。遠方に見えるのは山畑と緑を失った山肌。

ている。少数民族の住む山間地によく見られる湧水灌漑である。村人はこれらの泉に名前をつけ、精霊を祭って、周囲の森を大切に守ってきた。だが現在では、泉の回りのごく小さい範囲を残して、山の木々は伐採され、赤茶けた地肌が露出している。ここ数年来活発になってきた、タナペッ（葉巻を巻く葉）の商業生産のためであるという。タナペッの乾燥のためには大量の薪炭が必要だからである。

耕地の形態は、山の急斜面に切り開かれた山畑、耕地面積の大部分を占める灌漑付きの畑、そして灌漑水路下流部の低地に広がる水田の三つに分けることができる。山畑では、五月から一一月にかけての雨期に、キマメ、ニゲル、ヒナワリなどが混作される。灌漑畑では、雨期には村の最重要作物である小麦が作付けされ、乾期の収穫後すぐに、落花生や大豆が播種される。ミャンマー中央平原の畑作地帯でも二毛作は行われるが、大量の化学肥料が使用されている。だが、タンデー村では湧水灌漑が肥沃な山の養分を運んできてくれるので、厩肥以外の肥料は一切使われない。水田では雨期に水稲が作られるだけである。シャン米と呼ばれるこの米は、「ミャンマー人」好みのアミラーゼの多いぱさぱさ米ではなく、同じインディカでも粘り気が強い。ヤンゴンに住む日本人の主食は皆これである。

水田や畑の耕起は畜力によって行われ

PHOTO ESSAY
ミャンマー

小麦の収穫風景。一般に小麦の刈取りは女が行い、脱穀作業を男がする。

庭先で納豆を干す農家の女。つぶして干した納豆は村の市で売られる。

屋敷内を散歩するチョーゾー氏。後方は彼の家。筆者はここに泊めてもらった。

る。犂の形はミャンマー平原部と同じく枠型犂、すなわち中国型の犂である。ただし、牽き方は牛の二頭立てではない。エーヤーワディ川沿いの平原部からシャン高原に向かって高度を増すにつれ、牛は水牛に取って代わられ、しかも二頭立てから一頭立てに変わる。平原部の犂は一九世紀にシャンから導入されたというが、牽引方法は中国式からインド式に変わったようである。

田植えはミャンマー人の村同様、女の仕事である。けれどもタンデーの女は田植えができない。早乙女は何十キロも離れたところからやってくるインダー人の女たちである。また稲刈りのときにも遠くの村から農業労働者がやってくる。それでは村に農業労働者はいないのだろうか。否、この村にも平原部と同様に多くの土地なし世帯が居住しており、他に雇用機会がないので農業賃労働に従事している。だが、彼ら彼女らが主に従事するのは畑仕事である。耕起から始まって、播種、草取り、収穫、運搬と、多毛作の畑仕事には切れ目がない。

湧水灌漑のおかげで、この村の農民も農業労働者も、中央平原部の村よりも豊かな印象を受ける。それでも農業生産や消費生活に質的な差があるというわけではない。ところが、一人ここにとてつもない大農民がいる。チョーゾー氏がその人である。

彼は三〇〇エーカー（約一二〇ヘクタール）の農地を持ち（全国平均は五・五エー

PHOTO ESSAY
ミャンマー

チョーゾー氏の広大な農地を耕す、マッセーファーガソン社製のトラクタ。耕起した後にはサトウキビが植えられる。

市場で自家製の卵とこんにゃくと漬物を売る村の女性。

村営賭博場で深夜まで遊ぶ村の男たち。収益金は村の道普請に使われるという。

カー）、これを六台のトラクタ、四台の耕運機、七〇頭の牛および水牛、そして三〇〇人の労働者で経営している。しかも、何でも国有化してしまった社会主義時代からずっとこのような経営をしてきたというのだから驚きである。一九四八年のミャンマー独立以前、シャンには藩侯国という半独立国が林立していたが、彼の家は代々この藩侯（ソーボワ）に仕え、タンデー村を含む広い地域の領主であった。五九年に彼はヤンゴンで農機具の会社を起こし、その関係で日本にも六カ月ほど滞在している。しかし、六二年の社会主義「革命」で会社の土地、建物、数百台の耕運機等はすべて接収され、彼は村に引き揚げることを余儀なくされた。にもかかわらず、チョーゾー氏はにっくき社会主義計画党に入党して地方の幹部になるとともに、PNOとも誼を通じて、大経営を守り続けてきたのである。辺境の村であったからこそ可能だった計略であろう。

チョーゾー氏の例は特別としても、接収や重税に象徴される社会主義中央政権の統治が完全には及ばなかったことが、シャンの山奥のタンデー村に相対的な繁栄をもたらした一因であることは疑いない。では新たに登場した軍事政権とPNOとの停戦協定はさらなる繁栄をもたらすのか。今後もこの村の行方を見続けていきたい。

（たかはし　あきお／東京大学東洋文化研究所助教授）